源氏系圖

Genji keizu

[Kyoto, 1654?]

PL 788
.4
.G43G29
1654
Copy 1
Asian
Japan
Cage

20845513O4

太上天皇

おほひの奏され位をゆづりまおわり給ひて本の奏さ
うくれ給めさうつぎのれ門ありき給ふ桐帝ともあり

前坊　故院のれさうさうさと奏ささうと

秋好中宮　母六条れ息所

おほひよ秋家よさうち給これげうよ都へ向くさ給
詹合よ関よまわのて梅つぼとりさし女よ中宮
よさうれ法よ皇后宮よおぐさを給ひき給ふ秋好ともあり

桃園式部卿宮　うを給よう。うす雲の奏よさうう

檀那院　さうまよさものいつきよおう給。うす雲よ父のれ
服よりてありき也給。桃園宮よ女よ宮とおひて

まゐのふ　わき付ま撰とあり

三宮院のひらけ腹也　将政の小方よりものふ荻ぞう後乃巻よりくれ給　わき付よ大宝とあり

女五宮　桃園宮よ住ものふう　紀ぶよう毛

朱雀院　わき付朱　　母ハ弘徽殿大后

相つぎの巻よ長家あそんよれ伝よつき給　おぐらくらねを長家よ譲　りく礼上よれぐ〳〵おろして西山の寺よすまを給　同巻六条院れ宝れあよ一院とハしれ門也

今上――母承香殿女れ

明石の巻よ二歳とう毛　おぐらくよ長家　梅がえうれ元服　りく礼下よくらねよりうを給　わき付今上

女一の宮　　もろ礼の上ともも

落葉宮　　女一条院母后

もろ礼の下よ。柏木右衛門督の小宮よりも治。後

夕ぎりの大将ろくしやうともよ

二ぶ内親王　　女一先帝源氏宮

もろ礼よ。六条院よりろくして。月下よ二ぶし給。柏木の衛

ろくるをろくしやうともよ

女四の宮　　つろ礼よともも

春宮　　女一おとゝの中宮

もろふよむ。それのひる。月下よ治よおもよ

式乃宮　　如月に芸家に

白菊の咲き匂ひたる夕露に中将をそそのかして、六条院の寝殿を

やすらひ行く二の家ところどころ

白菊乃宮　　如月上

もれ下るむまれ給。白菊の咲き匂ひたる

うんぜむ。むつきの内へやしなひ給ふ三の家や

若君　　如月の中の君

やどり木は咲きむまれ給

常陸宮　　如月更衣

白菊の咲き匂ひたる夕露の中将のそそのかしにて

給ふ日、若君家ふたつ内へをきれ一人四の家ところ

中務宮　　女房同車。

月の夜弓射日夕雪の大将まゐりたりて車よりのをし給へ
しよの字。おづまやうの大字のれうやうに時まいり給へみや
ぢうに上野のみこと。爰上ようちうし給へし人

一品宮　　女房同車。

これもむしうさ紀の上やしきにて。六条院の南の町に
すまを給へる大将心ばせありてまうでし人

女二宮　　女藤つぼの女御

やぐらまへ内のれさうにて。ほう大将をむこに給
へりつぼの更衣

六条院

七歳にて源の姓を給はり。十二にて元服。ほうきぼし中将。

紅葉賀 正三位中將 如元 同巻 宰相中將 如元 巻 大將 次 の巻 より 浦 より 明石 の巻 より 松 より 須磨 より 巻 の 内 より 権大納言 より 内大臣 落雲 より 位 そ ひて 車 より 巻 の 号 を え の 内 より 付 添

大上天皇 の 号 を え の 内 より 付 添

一夕 の 霧 左大臣 母 葵 上

きりつぼ の 内 桐壺 の 帝 乙女 元服 して おとど より 紅 てんじ の 御 局 同巻 の 秋除目 より うへ より 給 朱雀院行幸 の 時 伯 より 玉 より 中將 萩 より 宰相中將 如元 萩 の うへ に 将中納言 より 巻 より 左大將 より 巻 より 右大臣 大將 如元 行 より 左大臣 辞大將

薫右大将　母、朱雀院女三の宮

相模の巻よりまれの事。白衣の巻より元服して、四位の侍従となる。その秋右近中将。十月巻より三位中将。宰相となる。中将如元　竹河より中納言。やどりぎの二月より後一物よ。按大納言にて右大将を兼ぬ

明石中宮　母あかしの上

こがねの三月より。明石の海にて生れ給。松風より都にのぼりて大井にすむ。うす雲より六条院へむかへ給。薄のうつろひより。雲ゐはるかにまいりて。さげいきやとより。出法より中宮。白衣の巻より皇太后宮

右衛門督　　按三条上

これ下﨟の集権院の賞のおぐれば、ことさまの程ふるぶる吹きこと自分の参りよのをり九日出仕をしへべこと思ふ事の実、宇治まで知業こと一日中宮のれ供こしてまうでこと、おげまれこととと

中納言　　按殿内侍

六条院夜のれこむこてやしこと、治次ぐ君集権院のれ賞れおぐおぐおぐ、おぐ、おぐ、お

右大辨　　廿三条上

まうけの家の寄りの日出仕をし人おもむがもと
ようどへまいりつどふ。これより左右に
いくら
侍従宰相　　廿准ずる
おもむきもとに。自家のそれをもちてその時宿へまいる
ちらし人
源宰相中将　　廿三条上
もとは蔵人。廿将行何ぞ三位中将。同寄ぞ宰相中将。
おもむがもとは権中将といふ。又まぼろしの寄り。
おもて行きあふぐ殿上人ぞといふ。此人ぞ

頭中将　女房内侍

行河よ源少将といへるやどりまで自文六の君ようひ
その給し時おとゝのはらへにまいりてとて
とばくへ一人椎本よりの中将といへるひとりあるべし

四位少将　女三条上

一本にかれるやこの時横河僧都のもとへ中宮れいつね
をし一人行川よ兵衛佐もおなじく老人兵衛佐といへる

童　女房ともあり

やどりまで今上の女二宮の女房のそんじ給し時笙ふき
しるし一人七くさとある

春宮女ぬ　女三条上

一 ㊀の家の妻より家へまいり給
一 中の君　女おとな
　 二の家のうるのくる
一 三の君　女房内侍
一 四の君　女三条上
一 五の君　女おとな
　 以上三人各ぐるまの妻なり
一 六の君　女房内侍
　 やぐらまえ白家よりかくれおち給
　 宮兵部つかさ宮
　 もとは帥宮しも女ゝ第雀院の行幸の時、兵部卿

うを給へるよう記事(きじ)のごとくうち

侍従(じじう)　　女房のごとくの

梅(むめ)がえの六条院うちのれつゐそれ本(もと)うつぐ

一人

童形(わらはがた)

同

此二人つれてよ。半蔀院の北(きた)の突(つき)のもぐりより方(かた)

まいのぼる

宮(みや)の御(おん)方(かた)　　女房(にようばう)　　北の対(たい)の人

女(をんな)うを給て後、女ばうどもよりて、按察大納言(あぜちだいなごん)のもとに

すこし給。白兵衛(しらべゑ)つ文(ふみ)をもてまいる。一人

四の宮　女　藤壺女御

みぢのごとくにて秋風未ふかぬ人

仲宮

かうた六条院の馬場のおとゞまで　おほぜ音々の夜

ゝゝひとゝりてうしの人

八の宮　女大臣女

宇治ゝうぢ橘姫のまき　ゝ

家とゝゝわき付ハ

紫角大夫　女大臣女　あげまき紀の寒ゝうを給わさ大

中宮　女おとゞ

あげまき紀ゝ音々ゝ夜ゝおのゝて早蕨ゝ二条院へむ人

られめよ　わき付中

浮舟　　女ひめぎみ

やどりまよひぢうちのぼりて東屋　わき詞

なるこひる小野　わき詞

式部卿宮

あづまやの琴ひきすさみ更行大将ようきこえ一人

げろくの琴ようをめくらし給ふ大将のおぼしいづ

侍従　　女房のさるのこと

宮志　　女なるど

女こゑうちそへてのち、おくれ一ふしのこゑへまいる　地

うき舟大将ようきこえ一人

冷泉院（れいぜいん）　母うつせ雲の女院

おほきさき藤壺女御ときこゆ　源氏の君の御ため
源氏の君十の御子（みこ）たちのうち第四の皇子
一の宮　母ひげくろの大臣の女（むすめ）
むまれ給ふ　竹河にくはし
女一の宮（よのいちのみや）　母弘徽殿仕大臣女（ちぢのおとどのむすめ）
一のきさきにまゐり給ふ
女二の宮　母一条院おほんいもうと
竹河にくはし
一の宮　母朱雀院おほんむすめ
女一の宮にまゐり給ふ

女二の宮
前秋院

あつひらのいたきさきおほきまち院のれいぐうにおりさせ給女三の宮とあり

先帝

弐の宮

もゝこめハ普門とそうしき・し女ハ弐の宮ともうなゐのねうゐん
薄雲女院　后ぐうの宮の宮ともうし

きりつぼハ内へさいり給ふ事なつがとそうしきも紅葉賀もみぢのが
とうぐう東宮ハれいぐうにおりさせ給ふ事ハきりつぼ巻にもあり

さうりおほう給ふおぢうハ大上天皇ほうぢやうほう

源氏宮（げんじのみや）

女房（にょうぼう）

女房（にょうぼう）

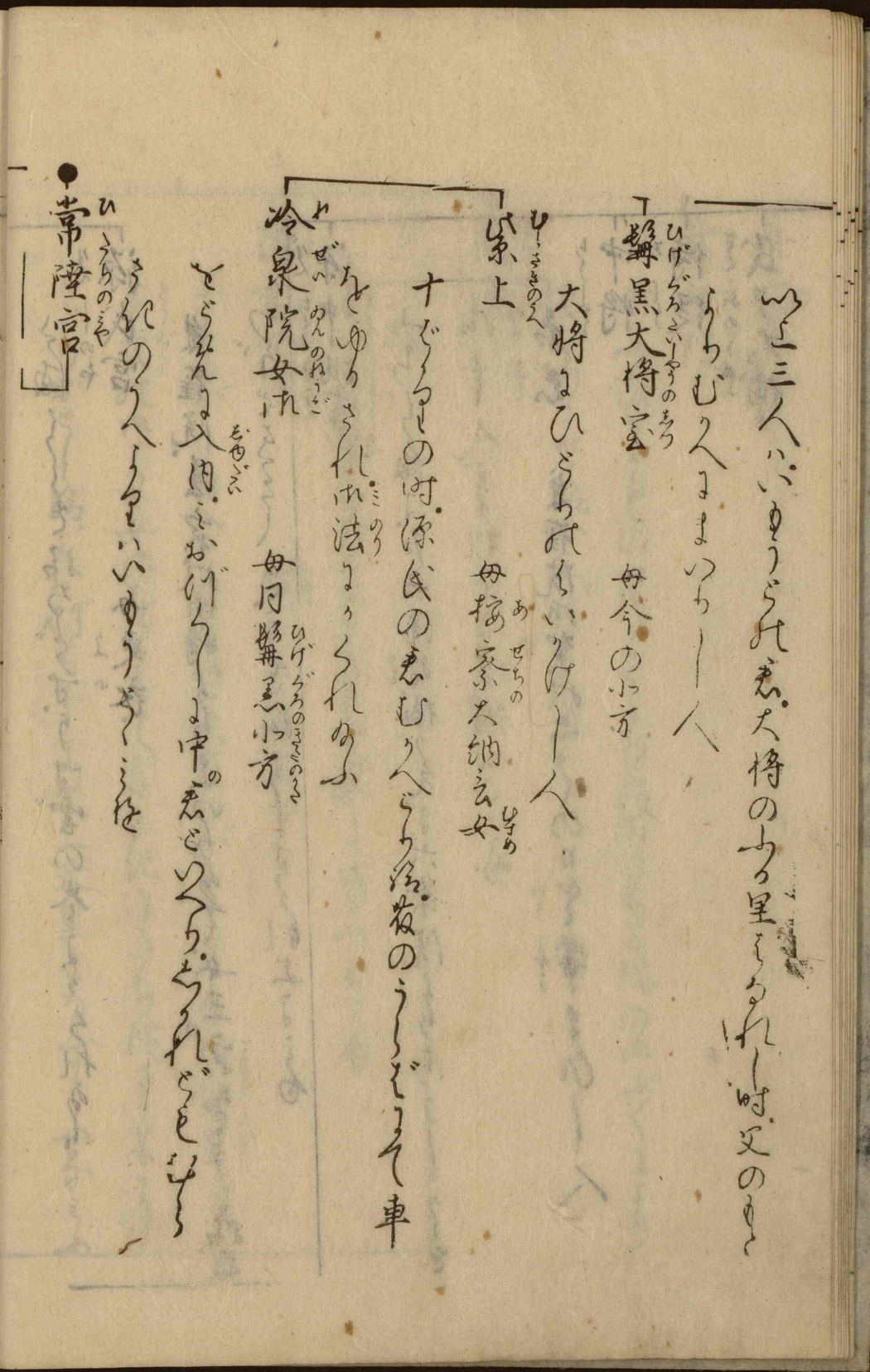
源中納言（げんちゅうなごん）

中将（ちゅうじょう）

侍従（じじゅう）

民部大輔（みんぶのたいふ）

若君（わかぎみ）


三人
大将
髭黒大将宮
女令の小方
大将
女按察大納言女
第上
女房
冷泉院女れ
女房
女房
女房
常陸宮

阿闍梨　私云和尚の条は醍醐の阿闍梨

源氏のれ八得まいりてえこにいもうとれもくうて

おもとう風かくらし人

薫生光　そそうむ条の条は源氏の光るあひ薫生

よひくぐのおんようけうひあふりき付まて

揚政太政大臣

そそうづくさ大臣そて源氏の光のかう冠をし人うう

まの条は致仕これびくる太政大臣そて摂政し給

うそ雲の四月ようを給りき付た大臣

致仕太政大臣——女三の宮

そそうづくさ人女将もくそぐにつス中将紅梨条は四位

位下・次ニ宰相中将・ニおづらゐ宰相中納言・ニ寸雲
ゐ権大納言ニて・右近大将を兼ぐ・さうゐ・内大臣・按乃
うゑぐらに太政大臣・ゐれ下ゐ・按仕の表ゐてまつりゐふ・
うをゐるうゑゐゐの巻ゐうゐ わき仕ゐ
左中弁

ゐひゐうゐ・小山へ源氏のれむ人ゐさいちー人ゐの
えんゐ中将・弁ちぐまいちあのそでいゐるも・ひ人ゐる
べー・タぐれの巻の花人弁ゐこれ人ゐや

藤大納言
春宮大夫

ひ二人ハ・源氏三条のゐやへゐるゐ話ニ・ゐれ・按仕のおと

ひさうれうまいりおほしめしたつねんごろ
とうえもん左衛門督中納言とこころもふかきこの人ぐ
をえおもふらんかなりしも左衛門督なり
参上　　母三の家
おほひの寒き夕ぐれの空をうちそうそうを給
はりて権大納言　母二条太政大臣女君
しもつかた近き将こてふ右近中将うらやまる
上は宰相左衛門督内大臣中納言権中将なる
これ権大納言なりて程ぢかくうをゆ
紅梅右大臣　母同上
ほうまうわらいて顔ふくらまれるもうれし

ひと人におげうま元服・初音まで廿将・ろれよう次弁・お
るて下る左大弁・柏木ま大納云うぐうもうもう時・一条の家
のれ宮ゝをれし人・すゞむしま冷泉院へまいうしもこの
人うべし・紅梅ま按察大納云ところ・竹ゞま夜大納云・左
大将うけうる右大臣ま改名ごいうう・又雀が本ま句宮の御匂
まうでのれむうへまいうし夜大納云もこの人咲べし・やぐう
まあうまやまいうて・按察大納云ごいうる不審
大丈
紅梅ま・つくしまて普ゝの宮いもうと氏北のう君給し人
麗景殿女れ　母故北方
紅梅ま兵衛へまいう給・

中の君　　おおぎみ

左衛門督

床夏の夜の程とつくづくいひ入るや

藤宰相

られ下よりものまつちの人さへ二人くらべこぎ出でよ

ごの六条と答へつつ漕ぎ出でそめ給ひて中三郎さぶらひて

人々玲瓏と六条院よりこぎ出でて冷泉院へ参りもひ入るや

頭中将

兵衛督

二人共幻の巻よりはじめ光君の御事ども書上げ給ふ時あひ

ごとに一人ごとの文をとつて文をごとの大将一

条家ようひ給ひて、ぜひ将をつとめて、ちくおんぐ
哀ごろひうちめしとゝくごの給ふ、ゆゑをとゝめよ、サ鋤云兵
隊の位、給ふたまさ位ちーもつれまゐれ時、兵隊位たま
さいつくるとこれへぐちるべー

八郎君

まれぐーる、踏哥の時ちくいまでありーへ人数のうぐ
の約者る、賀王恩まひーもこれ忘ちるべー

主髪尚侍　　女タぐのう人

四のらータぐのう人のめれこよぐーてこれうーへそるる、年一
つそ、むぐーの巻ゐ亲人のぼう、数ぐ爾ゐ、内侍、様相ゐ、
ひげぐろのかのるるもちのゐ

弘徽殿女御　　女房二人に相乗り

ここかしこ十二ばかりそれへまいりあう

右衛門督大臣室　　女房宰相の今の少将

雲のうへもくもりなくこひしき人　わき付書

近江君　　女房ささもりくみてさし出す人

二条大政大臣　わき付なし

朱雀院の女房　祖父ども大臣・納言など多くの人

藤大納言

頭弁　　女房白虹日を貫けりと演ずる人

麗景殿女御　　朱雀院うるわしの女房ふたり

四位少将　うへ人ふたり　源氏の君ひとり

まつりて。ゐ一ろべてのえちごとつうへし一人

左中弁　ふ二人ハ源氏ぬぼう月夜のけ来訪ものまゐりて。

かのぢんのうち殿よ人をつけてこゝをおし一ぬけ。弘徽殿ふう

出給人のれをうちもし一人ぐやみ。ふう年の冬ゝ中将宮乃

をけもぐつくうをこれ人ぐ弟

弘徽殿大后　わき付弘徽殿ハ悪ゐ

朱雀院のれ妃おつひゝ皇太后。うをおぬ申ぬ乳上ふう

宝帥宮小方　ゐのそんの冬ふう

按社大尽宝　四の忠とふうしふ

五の君　ゐのそんふうしふ

朧月夜尚侍　わき付朧月　おつひゝ朱雀院よまゐりてふうけ。ゐと

そこ也ごう来よ関得ろるかに尼よるり給六の志ことへ

●尼大臣

こゆさうろ様相よいろうろ弁さし大臣こ礼人るべー

●御郷　冷泉院れくるの時のふれまいぞごー尼よう哨

●尼大臣　極がえまさし大臣ろれ上のをひ人るべー

大蔵つ

●徐理大夫　ひ二人ふれひらけれろうよはあるぞ

●女壺女れ　今上妻家のれ時うまいり給ーがあー礼中

安まをされ給らい女二妻だろうをうこうてまうつうう哨

給うーやだうこにうろうろ又極がえよ厳帝敬ところて

ー三のふこ礼人よや

●左大臣　竹河と大臣と男も

女　夕霧の六の君　雲井雁の御腹

一時おひ立ち給ふ

●右大臣　今上の御祖父おとゞ

蔵人　黒太政大臣

こゝよりは大将ゆづり上よは左にて物ぞ。内下よは右大臣にて

と大将を辞ぜ。新帝ゆづり受け給ふ。太政大臣ぞう

を給ふ。一竹河よりこゝまでわき侍の分

頭中将

源氏の大将とゝもに一時内侍のつかさうち出給し

おりにさゝぬてぞとゝまりてこゝまでもてきたり

承香殿女御　梨壺院の女房、今二のれ女ちうをうへ
よりもれの下ようも

萩中納言　女蔵人文女
松桂よ十許にて、あどし給ふ行ぶの正月上の女の内侍
の許へもうでこちへやうまに萩のえんの日うひーさこも
次郎君　女かもど

まうねぐらよ八ぐらにて、ろれくらにうべきとこちらの
の話し人ろそのち昇進もぐこしぐ

右兵衛佐　女玉うづくのうへ

ろれ下よ女采の時おやうのみえ吹みみ又梨壺院れがえ乃
日陵王ひし人行ぼよ右近中将ごこも同琴よおひ

給うて、北条義時朝臣の家の日、
もうろひなびをしばへらるべし
右大弁　　如初
二人むづれ出、六条院よりれそまろれし時、
ぐてまいり給、又東雀院れ宮のむづれ日、おるでき前
日いまいり給ふる、竹河よ太中弁、同参よ太大弁
頭中将　　如初
竹河よ侍従同参よ左中将
真木柱よ　　如中納言よ同
ろれよ、宮の御方の小方よろいやうを給
後紅梅大臣、按察大納言とろれし時、小方よなる後、

まうれのうへうち我をとりまきてまもれおーうーん人

女房　女むらごの内侍

竹川の四月よ冷泉院へまいり給ふざうのれ子宰相中将

義人サ将ごうううーー時心つくーー給人

尚侍　女房れよおうむご

竹川よ女のゆづりをうけて内侍よりやごで過へまいりのみふ

●大片

六条院息所　十六まて前坊へまいり給秋好中宮とうめう

十九まてうやまとられ給ふまてむまれ秋宮よごーて

伊勢よごうち・こおげうーよのほりて・行ちうをう給ふ

●大片——女御　二条院の八文のれ女

●大臣

ひめ君二人うこをそてうれ給由そ〳〵ひろまる

宇治宮の小方

常陸の小方 わき腹

宇治宮の小方のめいとい中将忠さて家ようひさ小方うを給て後ほ母の忠をうめう後よ尊性よぶてまだおまうさ

●大臣

入道播磨守 近衛中将おうけう辞もて播磨守よたうさ

式国よてう〳〵夜おろ〳〵うろこもつれ土よ袖をうて

源山よいとめ

明石上

母中務親王のむまご

松風よ式部卿宮うれて大井にすみ〳〵し女よ六条院よつううて冬か

けうくらさしも

● 按察大納言

雲林院僧師

源氏の君のれそぢ法文ものがたりなどし給ふ

桐壺更衣

源氏の君をうへ給て三ねといふよりおもがはりして
まそばゆう時輦をゆるす鳥色ゆるすに三位をくく
● 按察大納言——嵯上母
● 按察大納言——五節君　しもよ葬ぬとちりて、やがてさ
● 大将
みくしげさゝほうばこのむすめもあり
東宮よりおこ大将こいふ　左近中将　ひくもれをけがむこ

●權中納言　右衛門督の子ども

右衛門佐　源氏中將のさぶらひの時童にて、ちゝ小ざゑもんいもうとの男よびてひきちらしくづをさゝやにのぼうつもしれおもしろやうの雲蝉一君

父中納言うせて後、子どもけがつまこもる。又ひきちらしなどもくづ一ゆびてくちをさゝやき京へのぼりて、月參りもせずとゞまりて坂尼ぜにて、二条院の東のみなみすこさ

●右衛門督一女　母をの尼　中將もろ人の心方

うせにしてちゝひとり

●參議宮内卿一明石乳母　母院宣旨

源氏ちゝひとりて明石へくだり給ふ風よき所へのがれめ

三位中将
夕顔上

女仕のおとこ若人の女房ども

の院ともろともにおはしまさうせぬ十九

宰相―宰相の君

人ども七八人ばかり薫ども

参議藤原惟光

乳母

もの民部大輔ども

兵衛尉

文ども

校典侍
山阿闍梨
廿将令婦
三河守妻

・前播磨守
源良清

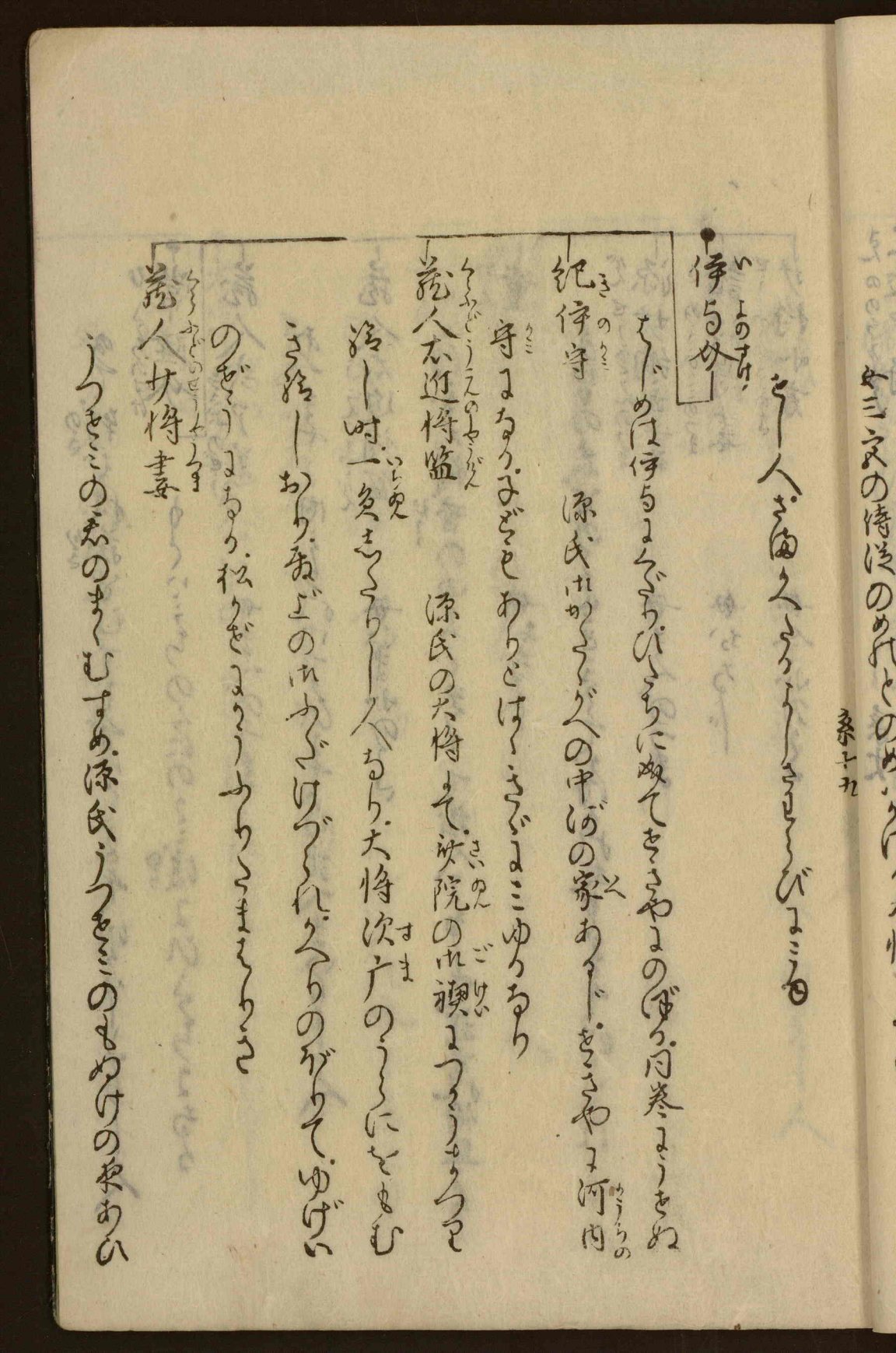
ゞ節の薄暮・夕雲れおそくの心ぐもれ下つ内侍依ども
惟光があにこタがかつこころ
タがかの炎つこころ
タがかつ大弐のあまれるやうはありさ

ゞ節
ゞ節の薄暮・落人そそうみ物語・あーまけ納言
どこもこいおげくつ勧負依・山女つ右中弁つそ近江守を兼ど
山女の炎つ内よもうーやそまふーふうーこも

・右中弁
弁尼

宇治の宮の小方ねるのをちこち
如柏木のめれと

ゞ三文の侍従のめれとのめいう内大将つ昔のまつこさう



女三宮の侍従のめのとの

そ一人さぶらふ

侍従

紀伊守

源氏れいのすぢごとの中ごの家あづけ

河内

守まもるなどもありとはべさぶらふ

源氏の大将

式部卿宮

兵衛督

右大将次ぐまうのぼりて

ゆげいさうなどのれいぶけづくれど

のぞうまもる松ぞうまもる

兵衛佐

うつをこのおのまくむすめ源氏うつをこのもぬけの

のて 判ぜられ義をむすぐぜそそそて 川かうそうそ一人

常陸坊

義人弐人 義経

女まへのつま

あづまやよ 内うち乱れつつひそて 句文へまいらそ一人

義人右近将監

女いま小のそ

うるる大将 昔のゆうこそそて義人るるて 我方乱将監るる

童

女おるる

多羽の衣をのようとささて 源九文りまて川いられ一人

源廿納言妻

女まへのつま

讃岐守妻

女おるど

廿将小方

女今小のそ

手習の子ども一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八人

太宰大貳

源氏次ノ間より出ると其のまゝ引くるまにのりて出づ

左兵衛督

筑前守

五郎

源氏あひこゑ一人ありて父ともに次ノ間へ出る一人

家又明石巻にもをとづれありてこゝにも

太宰少貳

タごゑの一人のみをとをす

豊後介

父ともに後むきにて引くるまにのりて六条院へ行る

治一時、それぞれの家司(けいし)ども付(つ)けつかさ

次郎(じろう)

三郎(さぶろう)

楊名介妻(やなぎのすけのつま)

姉(あね)おもと

二人(ふたり)いづれもめしつけて来(き)へものがたりの巻(まき)ども

これをいづれもあるとつさてのがるゝもまたいあてざといひさ姫君(ひめぎみ)よりぐしてのがれんぐしけりこと

如月清門(きさらぎきよかど)の乳母(めのと)

按察大納言(あぜちのだいなごん)

按察大納言(あぜちのだいなごん)令婦(れいふ)

もゝつむ、志の夏須氏(こしきうじ)よりこさうし人

69038
6AP78